

2023 年度 1 学期終業式

皆さん、おはようございます。

4 月に始まった 1 学期も、今日、終業式を迎え、明日から夏休みに入ります。4 月の始業式では今年度の目標「自己肯定感を高めよう」を実現する一つの方法として TGT ジャーナール、すなわちその日にあった 3 つの良いことを日記にすることを紹介しました。私自身、4 月から始めて本日まで続けています。実践してみてどうだったかを申し上げますと、毎日が良かったことだらけになる、辛いことがあっても良いことを思い起こしているために辛いことに引きずられることがない、というのが感想です。皆さんはいかがでしょう？そこで今日は、この 1 学期にあった 3 つの良いことを皆さんと分かち合いたいと思います。

1 つ目は生徒の皆さんに関すること。2 つ目は本校の設立母体であるベリス・メルセス宣教修道女会のシスター中村訓子からいただいたもの。3 つ目は同じくベリス・メルセス宣教修道女会のシスター清水靖子からいただいたものについてお話ししたいと思います。

まず 1 つ目の皆さんに関する良かったことですが、4 月の光塩祭、6 月の教育実習の先生方との関わり、日頃の授業における取り組み、5 月・7 月の定期試験の際の真剣に臨む姿、どれをとっても皆さんは美しく輝いていて、その姿から多くの元気をいただきました。いつも本当にありがとうございます。

次に 2 つ目です。職員室前の掲示板に貼ってある 5 月 21 日のカトリック新聞『山谷』から ⑭祈りのカードとあきら」という記事を読んだ方もあると思いますが、まだ読んでいない方のためにその内容を紹介します。高等科生の幾人かは、中 3 の時にシスター中村訓子が運営する山谷「ほしのいえ」を訪れていると思います。「ほしのいえ」は身寄りがなく、事情があって野宿をしている方々を支援し、炊き出しも行っています。記事の内容は次の通りです。「3 月下旬、山谷地区にあるホスピス『きぼうのいえ』の担当の方から、電話がありました。隅田川の管理をしている会社が、野宿をしていた瀕死状態の男性を見つけ、救急車を呼び、病院へ搬送。そこで下された診断が、余命 1 か月もない『末期がん』でした。そのため、病院での治療後に行くはずだったいくつかのシェルターに断られ、みとりができる『きぼうのいえ』に来ることになったそうです。その男性はポケットに主の祈りと、クリスマスのカードを大切にしまっていました。」とありました。この主の祈りとクリスマスカードは、中 2 以上の皆さんは覚えていると思いますが、光塩女子学院で皆さんが心を込めて書いて作成しお菓子のプレゼントと一緒に包装し、山谷「ほしのいえ」にお送りしたものの 1 つです。そこで「きぼうのいえ」の担当の方がシスター中村に、男性と知り合いではないかと尋ねてきたのです。名前を聞くと昔シスター中村の「ほしのいえ」が行う炊き出しに来ていた「あきら」さんでした。電話の翌日、「あきら」さんは「きぼうのいえ」で大切にみとられて亡くなりました。

シスター中村は続けて次のように語ります。「火葬の前、お棺のあきらに、皆で主の祈りを唱え、聖歌を歌うことができました。私が知っている生前のあきは、顔が真ん丸で恰幅がよかったのですが、ガリガリに痩せこけ、がんの痛みを耐えて、つらかっただろうなと思います。正直なところ、私はあきらがお祈りをする性格とは考えられません。けれどもポケッ

トにカードを大切にしまっていたのは事実です。困っていた時に、こっそり祈っていたのかもしれないですね。私たちの活動に宣教は一切ありません。とにかく目の前にいる人が、自分の『いのち』を生きてほしい、毎日を生き延びてほしい、そんな思いで炊き出しをする、小さな支えしかできていません。そういった関係性の中に、ほんの少しでも私たちのつながりがあった。私はそれが、すごくうれしかったのです。」

皆さんのあたたかい心がシスター中村や他のボランティアの方を通して多くの人に届き、そのお一人は死の直前までそのぬくもりを大切に持って感じてくださっていた。本当に喜ばしく有り難いことです。

最後に 3 つ目の良かったことです。ベリス・メルセス宣教修道女会のシスター清水靖子が著した『新版 森と魚と激戦地』（三省堂書店）をいただきました。図書室、そして倫理科の書棚にも入っていますので、ぜひ皆さんに読んでほしいです。今日はこの本の内容の一部を紹介したいと思います。この本の中には、太平洋の島々、特にパプアニューギニアについて詳しく書かれています。第二次世界大戦中、日本軍はここを支配していて、現地の人々にかなり酷いことをしました。その惨状について多くの方からの証言が載せられています。その中には有名な漫画家の水木しげるさんの証言もあります。日本軍から受けたひどい仕打ちとは裏腹に、現地の人々は、困っている日本の生き残り兵や漂流兵を助けたという沢山のお話も書かれています。

戦時中は日本軍が戦車を持って来て上陸しましたが、第二次世界大戦後、今度は日本の企業がブルドーザーを持って来ました。豊かな原生林がねらいです。原生林の熱帯雨林から多くの木を伐採していきます。そして、多くの木が丸太にされ、積み出され、港から船で運び出されました。その結果、森林の生態系は破壊されました。同時に海では日本などの船がやって来てマグロをはじめとする魚介類をたくさん捕って行ってしまいました。森林が元気であれば海も元気ですが、伐採により森林の環境はすっかり変えられてしまい、大量の乱獲により海も元気をなくし、山の幸も海の幸もすっかり少なくなってしまいました。私たちはそんなことは意識しないで、安い値段で大量の紙と木材を消費し、安い値段で多くのマグロや魚介類を食べてしまっています。現地の人々は、太古の昔から必要な分だけ感謝していただき、それ以上は捕らないので豊かな自然のバランスが保たれていたと言えます。

森林を守ることは、海を守り、次の世代に命をつなぐことになります。それをよく心得ているのは女性たちでした。ベララベラ島のレオナ村の女性たちは、命をかけて次世代の子どもたちのために素手と非暴力で原生林を守りました。原生林の入り口に何日もテントを張って寝泊まりし、ブルドーザーの前に横たわりました。その結果、企業に伐採を諦めさせ、子どもたちのために原生林を守り切りました。シスター清水靖子はこのような人々と交わり、寄り添い、共に手を取り合って熱帯雨林を守る活動を続けていらっしゃいます。レオナ村の他にもニューブリテン島のウボル村やタボロ村、マラクル村の人々と共に歩んでいらっしゃいます。

豊かな森林が守られれば豊かな多くの自然生物も守られます。木の上に棲むクスクス、ウボル村のトリバネアゲハ、はち切れんばかりの笑顔の少年たち、真っ白いコカトゥと少女、人間の赤ちゃんとオウム貝、サイチョウと子ども、美しい夕暮れ、タボロ村の笑顔の子どもたち、最後の熱帯雨林の楽園マラクル村のスシ泉、“ワラ・カラップ滝”、お父さんが鉈で突

いてきた魚、奥地に棲息するカソワリの卵を見せてくれた少女、楽しい井戸端会議、笹の葉っぱで作った風車で遊ぶ子どもたち、マラクル村の笑顔の少女たち、そして、シスター清水とマラクル村の人々。太古からの自然と人間は、共に寄り添いながら、生命の喜びを紡いできました。

その相互依存の素晴らしさは、また一方で、その一端が人間の業(わざ)で破壊されると、将棋倒しのように、悪循環を起しながら、災害をもたらすものとなってしまいます。

現在日本で起きている豪雨災害、様々な地球温暖化に伴う自然災害は、自然との調和を忘れて過ごしてきたことによります。森林を守る人々から学べることはたくさんありそうです。

この 7 月に中 1 と高 1 は長野県四阿高原で林間学校(山荘生活)を行います。光塩女子学院中等科・高等科としては 4 年ぶりの林間学校です。森林の中で改めてこの自然を守るために自分たちにできることを考えてみましょう。